

## エゼキエル書12-14章 「偽りの預言」

### 1A 実演する預言 12

1B 荷物まとめて逃げる王 1-16

2B こわごわ水を飲む住民 17-20

3B 幻を否定する者たち 21-28

### 2A 偽預言者 13

1B 人の思いを預言する者たち 1-16

1C 破れ口を修理しない者 1-9

2C 壁の上塗り(偽りの平安) 10-16

2B 金儲けする女たち 17-23

### 3A 偽預言を求める者たち

1B 心に偶像を秘めている者たち 1-11

2B 正しい者によって救われない町 12-23

## 本文

エゼキエル書 12章から読んでいきます。私たちはずっと、主がバビロンによってエルサレムを裁く預言を読んでいっています。4章から7章までに、エゼキエルによる象徴的な行為によって、エルサレムが包囲され、火で焼かれることの預言がありました。そして8章から11章において、神殿において忌まわしい偶像が拝まれていて、それゆえに主がご自分の栄光をケルビムと共に徐々に引き離し、ついに去っていかれたところを読みました。

そして12章です。主は改めて、エルサレムの破壊について預言されますが、ここ12章から14章までは、この預言に対して反発する人々の心を描いています。その預言は受け入れられない反逆の心を描きます。

そして厄介なのは、その心を代弁するかのような偽預言が起こることです。これはエレミヤも対峙しましたが、神の家の中ではこれが最も厄介な問題の一つです。外部にどれだけ敵がいようと、主が私たちの味方ですから、大きな問題ではありません。むしろ主の中にしっかりと立っているように、神を信じているようにすることが奨励されます。しかし、偽預言というのは、主ご自身以外に他により頼むことができるのだ、ということ教えるのです。その土台となっている神への信仰を、切り崩していく動きを、偽預言者は作りだしています。ですから、教会にとっても日常の生活が大変だというのは、大きな問題ではありません。キリストは私たちに、ハデスの門にも打ち勝つ権威、天の御国の鍵を与えてくださったのですから。しかし問題は、キリスト以外のものを付け足そうとする力が働き、その巧妙な策略をもって悪魔は滅ぼそうとすることです。ですから、使徒たちは新約聖書の中で、激しくそうした偽りの教えと戦いました。そういったことから、聖書を読んでいき

たいと思います。

## **1A 実演する預言 12**

### **1B 荷物まとめて逃げる王 1-16**

12:1 ついで、私に次のような主のことばがあった。12:2 「人の子よ。あなたは反逆の家の中に住んでいる。彼らは反逆の家だから、見る目があるのに見ず、聞く耳があるのに聞こうとしない。12:3 人の子よ。あなたは捕囚のための荷物を整え、彼らの見ている前で、昼のうちに移れ。彼らの見ている前で、今いる所から他の所へ移れ。もしかしたら、彼らに自分たちが反逆の家であることがわかるかもしれない。12:4 あなたは、自分の荷物を昼のうちに彼らの見ている前で、捕囚のための荷物のようにして持ち出し、捕囚に行く人々のように、彼らの見ている前で、夕方、出て行け。12:5 彼らの見ている前で、あなたは壁に穴をあけ、そこから出て行け。12:6 彼らの見ている前で、あなたは荷物を肩に負い、暗いうちに出て行き、顔をおおって地を見るな。わたしがあなたをイスラエルの家のためにしるしとしたからだ。」12:7 そこで、私は命じられたとおりに、私の荷物を捕囚のための荷物のようにして昼のうちに持ち出し、夕方、自分の手で壁に穴をあけ、彼らの見ている前で、暗いうちに荷物を背負って出て行った。

この預言は、エゼキエルが8章から11章までにおいて、エルサレムにまで霊によって移された、神殿から神の栄光が去ったことを彼らに話して間もない時だったのでしょう。11章25節に、「そこで私は、主が私に示されたことをことごとく捕囚の民に告げた。」とあります。ここまでしてエゼキエルが語っているのですが、まだこれを真に受けとめていなかったのが捕囚の民です。けれども、既にエルサレム破壊の紀元前586年へは、5年間に迫っていました。彼らはそれでも、2節にあるように、「見る目があるのに見ず、聞く耳があるのに聞こうとしない」と言っています。私たちはとかく、これを「無関心」であるとか、「無理解」ということで片づけてしまいますが、深い霊的な視点からは、「神という主権者に対して反抗している」のです。「反逆の家」であります。

それで主はエゼキエルに、再び象徴的な行動をしてもらうことにしました。ここに書いているのは、ゼデキヤ王がこっそりとエルサレムから逃げる様子であります。このことが成就した歴史的出来事を、列王記第二25章1-7節で読んでみましょう。「ゼデキヤの治世の第九年、第十の月の十日に、バビロンの王ネブカデネザルは、その全軍勢を率いてエルサレムを攻めに来て、これに対して陣を敷き、周囲に壘を築いた。こうして町はゼデキヤ王の第十一年まで包囲されていたが、第四の月の九日、町の中では、ききんがひどくなり、民衆に食物がなくなった。そのとき、町が破られ、戦士たちはみな夜のうちに、王の園のほとりにある二重の城壁の間の門の道から町を出た。カルデア人が町を包囲していたので、王はアラバへの道を行った。カルデアの軍勢が王のあとを追い、エリコの草原で彼に追いついたとき、王の軍隊はみな王から離れて散ってしまった。そこでカルデア人は王を捕え、リブラにいるバビロンの王のところへ彼を連れ上り、彼に宣告を下した。彼らはゼデキヤの子らを彼の目の前で虐殺した。王はゼデキヤの両目をえぐり出し、彼を青銅の足かせにつないで、バビロンへ連れて行った。」ここに書かれている、「そのとき、町が破られ、戦士たち

はみな夜のうちに、王の園のほとりにある二重の城壁の間の門の道から町を出た。」という部分を、実演したのです。

12:8 翌朝、私に次のような主のことばがあった。12:9 「人の子よ。反逆の家、イスラエルの家は、あなたに、『何をしているのか。』と尋ねなかったか。12:10 彼らに言え。『神である主はこう仰せられる。この宣告は、エルサレムの君主、およびそこにいるイスラエルの全家にかかわるものである。』12:11 また言え。『私はあなたがたへのしるしである。私がしたようなことが彼らにもなされる。彼らはとりことなって引いて行かれる。12:12 彼らのうちにいる君主は、暗いうちに荷物を背負って出て行く。出て行けるように壁に穴があげられる。彼は顔をおおうであろう。彼は自分の目でその地をもう見ないからである。』12:13 わたしはまた、彼の上にわたしの網をかけ、彼はわたしのわなにかかる。わたしは彼をカルデヤ人の地のバビロンへ連れて行く。しかし、彼はその地を見ないで、そこで死のう。12:14 わたしはまた、彼の回りにいて彼を助ける者たちや、彼の軍隊をみな、四方に追い散らし、剣を抜いて彼らのあとを追う。

エゼキエルは、初めに神に行動するように命じられ、次の日の朝にその意味を彼に伝え、そして人々に伝えるように命じられました。王がまるで捕囚の民のように虜とされることを、はっきりと告げておられます。そして興味深いのは、出ていくとき、誰だか分からないように頭を覆ったのでしょう、地面を見ないでいく、そしてもっと興味深いのは、バビロンにまで連れて行かれるけれども、ここでもその地を見ない、ということです。これは、先の列王記第二の記述を見れば、彼がバビロン王によって目を抉り出されて、それからバビロンに連れて行かれるので、その地を見ていないのです。こうやって、彼は目を暗くされたままで残りの日々を過ごしました。ここにはおそらく、「神に反逆したので、暗闇の中を生きる。」という深い意味があるのでしょうか。

このことは、彼らにとってはあまりにも受け入れがたいことであつたでしょう。自分たちは捕囚の民です。けれどもエルサレムに戻るから希望があるのであって、そこには神殿があり、また王がいる。私たちはバビロンからイスラエルに戻る、という希望です。しかし、主は、そうではないことをはっきり示し続けていました。

12:15 わたしが彼らを諸国の民の中に散らし、国々に追い散らすとき、彼らは、わたしが主であることを知ろう。12:16 彼らが行く先の諸国の民の中で、自分たちの、忌みきらうべきわざをことごとく知らせるために、わたしが彼らのうちのわずかな者を、剣やききんや疫病から免れさせるとき、彼らは、わたしが主であることを知ろう。」

主は、ご自分がするとお決めになったことは必ずします。まず、離散の民も頼りにしていた王やその側近たちは追い散らされます。そして、僅かな者たちがエルサレムから出ていくことができ、そしてその彼らがバビロンに自分たちの身に起こったことを伝えます。その時に、彼らがこの方が確かに主であることを知ります。心が変わられるのですね。

### 2B こわごわ水を飲む住民 17-20

12:17 ついで、私に次のような主のことばがあった。12:18 「人の子よ。震えながらあなたのパンを食べ、おののきながら、こわごわあなたの水を飲め。12:19 この地の人々に言え。『神である主は、イスラエルの地のエルサレムの住民について、こう仰せられる。彼らは自分たちのパンをこわごわ食べ、自分たちの水をおびえながら飲むようになる。その地が、そこに住むすべての者の暴虐のために、やせ衰えるからである。12:20 人の住んでいた町々が廃墟となり、その地が荒れ果てるそのとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。』」

エゼキエルは主に再び、僅かなパンと水で彼らがエルサレムの中で餓死していくことを、演じるように命じられています。そして次の、午前礼拝で読んだ箇所に入ります。彼らは、こうしたことをそのまま受け入れなかったのです。言い訳をしました。

### 3B 幻を否定する者たち 21-28

12:21 さらに、私に次のような主のことばがあった。12:22 「人の子よ。あなたがたがイスラエルの地について、『日は延ばされ、すべての幻は消えうせる。』と言っているあのことわざは、どういうことなのか。12:23 それゆえ、神である主はこう仰せられると言え。『わたしは、あのことわざをやめさせる。それで、彼らはイスラエルでは、もうくり返してそれを言わなくなる。かえって、その日は近づき、すべての幻は実現する。』と彼らに告げよ。12:24 もう、むなしい幻も、へつらいの占いもことごとく、イスラエルの家からなくなるからだ。12:25 それは、主であるわたしが語り、わたしが語ったことを実現し、決して延ばさないからだ。反逆の家よ。あなたがたが生きているうちに、わたしは言ったことを成就する。…神である主の御告げ。…」

ここで彼らは、もしかしたら、他の預言者たちの言葉を思っていたかもしれません。それは、イザヤやミカ(3:12)が、エルサレムが滅ぼされると預言したことです。しかし、ヒゼキヤが悔い改めの祈りをささげたので、エルサレムはアッシリヤの手から救われました。しかし、これを彼らはこのようにして、今も、エルサレムに対する、エゼキエルによる幻は、引き伸ばされ、そしていつの間にか消え失せるものだろう、と思っていたかもしれません。

はたして、そうなのでしょうか？主は、ご自分が滅ぼすと語られても、それは飽くまでも彼らが悔い改めなかったら、という前提があるからで、宿命的に語られているものではありません。主は情け深く、怒るに遅いお方であり、恵みを千代にまで及ぼされる方です。そして今のエルサレムがあるのは、あくまでも神の憐れみによるものであり、ヒゼキヤがへりくだったからに他なりません。本来なら滅ぼされなければいけないところを、主が憐れんでそうしてくださっているだけなのです。それが当然の権利で、無条件にエルサレムが守られているということではないのです。しかし、私たちが心で貪っている時は、そのようにして言い訳をいってしまう。

これが私たちの墮落した思いであり、神が祈りを聞かれて憐れんでくださっているからこそ成り立っているものを、当たり前のものであるかのように考えて、その中に安住して、主により頼むことをやめるといことがあってはなりません。例えば、私たちはこの日本語学校が、もしかしたら間もなく使えなくなるかもしれないと二カ月ほど前に言われました。けれども、学校そのものが他に引っ越さない限り、ここを使ってもよいことになりました。祈りました、そして主が憐れんでくださいました。けれども、私たちの心がそれで主に憐れみを求めることをやめるなら、いつでも主は取り除かれます。

12:26 さらに、私に次のような主のことばがあった。12:27 「人の子よ。今、イスラエルの家は言っている。『彼が見ている幻はずっと後のことについてであり、はるか遠い将来について預言しているのだ。』12:28 それゆえ、彼らに言え。『神である主はこう仰せられる。わたしが言ったことはすべてもう延びることはなく、必ず成就する。』・神である主の御告げ。・」

この心も墮落した思いを表しています。いかにも正当であるかのような解釈、また説明であります。ただ今の自分たちの生活のあり方を、故郷エルサレムは安泰で、自分たちはすぐに戻れると思っているから、そんなことを考えていただけでした。

## **2A 偽預言者 13**

そして 13 章に入ります。偽預言者に対する言葉です。こうした人々の思いや願いと、彼らの偽預言は直結しています。

### 1B 人の思いを預言する者たち 1-16

#### 1C 破れ口を修理しない者 1-9

13:1 次のような主のことばが私にあった。13:2 「人の子よ。預言をしているイスラエルの預言者どもに対して預言せよ。自分の心のままに預言する者どもに向かって、主のことばを聞けと言え。13:3 神である主はこう仰せられる。自分で何も見ないのに、自分の霊に従う愚かな預言者どもにわざわいが来る。13:4 イスラエルよ。あなたの預言者どもは、廢墟にいる狐のようだ。13:5 あなたがたは、主の日に、戦いに耐えるために、破れ口を修理もせず、イスラエルの家の石垣も築かなかった。

預言者と偽預言者の違いは、はっきりしています。それは、偽預言者は、「自分の心のままに預言」し、「自分で何も見ないのに、自分の霊に従う」ことをしているからです。自分の願っていること、自分の思っていること、自分の主張、こういったものがいかに正しいように聞こえようとも、神には断罪される、忌むべき汚れた言葉であります。私たちには、絶えずこの戦いがあります。自分の思っていること、感じていることを優先させるのか、それとも、自分を否んで、自分を退けて、主ご自身の混じりけのない言葉を選び取るかの選択があるのです。「2ペテロ 1:20-21 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施して

はならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」聖書こそが、神の御霊による言葉です。

そして偽預言者たちを、「廃墟にいる狐」と言っています。狐は、全てのものが破壊されていても、そこで餌になるものを見つけて徘徊します。それと同じように、民が滅ぼされても、エルサレムは破壊されても、それでも自分の利益を求めて動いていく連中であります。教会を自分の利益のため、自分の目的のために利用し、それで教会をだめにしていく指導者とも言えるでしょう。

それから大事な言葉が5節にあります。ここの「主の日」とはおそらく終わりの日のことではなく、バビロンによるエルサレム破壊の日です。そして、「戦いに耐えるために、破れ口を修理もせず、イスラエルの家の石垣も築かなかった。」であります。これは比喩的、霊的に使っています。戦いにおいて、自分たちの町が包囲された時に城壁は欠かすことのできないものです。そこで、ちょうど船の底に穴が開いていたら致命的なように、城壁に破れ口があったら敵が侵入してきて致命的です。それで、破れ口を修理するのです。これが霊的にそうなのだ、ということです。私たちは絶えず、霊の戦いの中にいます。そして、敵はよく知っています、私たちには心において霊の城壁があるのですが、その破れ口になっているところがあります。例えば、ある人にひどいことをされて、それでその人をどうしても憎んでしまうとか。ある罪の習慣から抜け出せないとか。そういったところから、悪魔は集中攻撃してきて、私たちをダメにしてしまうのです。そこで、預言者は神から言葉を受けて、そのところに神に要塞による守りを固めるべく、ちょうどネヘミヤが城壁を再建させたのと同じように、工事を手助けするのです。ところが、そうしたことを偽預言者は怠っているのです。ですから、敵に対して無防備なままにさせています。

13:6 彼らはむなしい幻を見、まやかしの占いをして、『主の御告げ。』と言っている。主が彼らを遣わされないのに。しかも、彼らはそのことが成就するのを待ち望んでいる。13:7 あなたがたはむなしい幻を見、まやかしの占いをしていたではないか。わたしが語りもしないのに『主の御告げ。』と言っている。13:8 それゆえ、神である主はこう仰せられる。あなたがたは、むなしいことを語り、まやかしの幻を見ている。それゆえ今、わたしはあなたがたに立ち向かう。・・神である主の御告げ。・・13:9 わたしは、むなしい幻を見、まやかしの占いをしている預言者どもに手を下す。彼らはわたしの民の交わりに加えられず、イスラエルの家の籍にも入れられない。イスラエルの地にもはいることができない。このとき、あなたがたは、わたしが神、主であることを知ろう。

預言であるとか、占いのように語り、「主が語られます」などという人は、跡を絶ちません。しかし、それだけではありません。黙示録には、「イエスのあかしは預言の霊です。(19:10)」とあります。主イエス様が中心のテーマにならない言葉は、多くの知識を得ても決して本物ではありません。イエス様だけに頼らなければいけない、この方にこそ救いがあり、希望があるのだという結論に至らない教会関係者の言葉が、数多くあります。ある人は、自分の中に希望が見いだせると言います。

心理学のような手法で、それを説きます。ある人は、政治の中に希望があると言います。この問題を無くすために政治を動かそうと駆り立てます。他にも、巧妙に語りかけるでしょう。しかし、それらは唾棄すべきものです。

そして偽預言者に対する罰は厳しいです。彼らは必ず、地獄に行くことを神は語られます。「わたしの民の交わりに加えられず、イスラエルの家の籍にも入れられない。イスラエルの地にもはいることができない。」というのは、そういうことです。

### 2C 壁の上塗り(偽りの平安) 10-16

13:10 実に、彼らは、平安がないのに『平安。』と言って、わたしの民を惑わし、壁を建てると、すぐ、それをしっくいの上塗りしてしまう。13:11 しっくいの上塗りする者どもに言え。『それは、すぐはげ落ちる。』大雨が降り注ぎ、わたしが雹を降らせ、激しい風を吹きつける。13:12 すると、壁が倒れ落ちる。人々はあなたがたに向かって、『上塗りしたしっくいはどこにあるのか。』と言わないだろうか。13:13 それゆえ、神である主はこう仰せられる。わたしは、憤って激しい風を吹きつけ、怒って大雨を降り注がせ、憤って雹を降らせて、こわしてしまふ。13:14 あなたがたがしっくいの上塗りした壁を、わたしが打ちこわし、地に倒してしまうので、その土台までもあばかれてしまふ。それが倒れ落ちて、あなたがたがその中で滅びるとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。13:15 わたしは、その壁と、それをしっくいの上塗りした者どもへのわたしの憤りを全うして、あなたがたに言う。壁もなくなり、それにしっくいを塗った者どもも、いなくなった。13:16 エルサレムについて預言し、平安がないのに平安の幻を見ていたイスラエルの預言者どもよ。…神である主の御告げ。…

かつて私が、大学生だった時でしょうか、クリスチャンになったばかりの時に、伝道集会の中で、ある方がこんな説教をしていました。「あなたは OK、私も OK。」そのままのあなたで大丈夫ですよ、そして私もありがままで生きて、という内容です。当たっているようで、思いつき間違っています。主は、私たちをあるがままの姿でもこよなく愛しておられます。しかし、「そのままがいい」訳がありません！神は泥だらけの私たちを、きれいにしてくださいます。神の恵みは、罪の中に生きている私たちを、罪を捨てて、悔い改めて、神の聖さにあずかるようにすること、それが神の恵みです。ところが、今のあなたを神はそのまま受け入れ、愛されるのではなく、今のままでいいのだ、というのはとんでもない偽りの教えです。エゼキエルは基本的に、「今のままのあなたであれば、滅びる！」と説教していたのです。

ですから、ここで平安がないのに、平安だということを、漆喰の上塗りに喩えています。イスラエルに行けば、漆喰で塗られている遺跡が残っていますが、漆喰の役目は、当時、石や煉瓦などで家を建てたとき、石の形が合わず凸凹の所があっても、しっくいで平らにして見た目を良くしていくものです。私たちは、じっくりと御言葉に取り組むことは忍耐と鍛錬を必要とします。そこで、少しずつ聖められていきます。時に、聖書を投げ出したくなることもあるでしょう。自分がとても嫌になるこ

とがあります。そうした、神との相撲、ヤコブが御使いと格闘したような、自分の太ももの関節が外されるような痛みも伴うことがあるでしょう。そうやって、ようやく信仰の土台が据えられていくのです。主のみことばを深みにまで受け入れ、神のご計画の全体を聞いていくことによって、それで土台ができ、嵐が来ても、洪水が押し寄せても、イエス様のたとえのように押し流されないですむのです。

ところが、すぐにそれができあがっていくような手軽に、目的を達成できるような教えがあります。それを「しっくいの上塗り」と言ってよいでしょう。これさえやっておけば大丈夫だ、と言わせるようなものがあれば、それは偽物です。それは、関係ではなく、何かをしていることによってできると教えます。それは一つの規則かもしれません。あるいは教会の活動かもしれません。立派なキリスト者のように見える一定の型であるかもしれません。しかし真実の平安は、私たちが父なる神を仰ぎ見ることのできる関係です。父ですから鍛錬し、それゆえ懲らしめも受け、しかしそれで初めて成熟し、平和の義の実を結ばせることができます。

## 2B 金儲けする女たち 17-23

13:17 人の子よ。自分の心のままに預言するあなたの民の娘たちに、あなたの顔を向け、彼らに預言して、13:18 言え。神である主はこう仰せられる。みなの手首に呪法のひもを縫い合わせ、あらゆる高さの頭に合うようにベールを作って、人々をわなにかける女たちにわざわいが来る。あなたがたは、わたしの民である人々をわなにかけて、自分たちのために人々を生かしているのだ。13:19 あなたがたは、ひとつかみの大麦のため、少しばかりのパンのために、まやかに聞き従うわたしの民にまやかしを行ない、死んではならない者たちを死なせ、生きてはならない者たちを生かして、わたしの民のうちでわたしを汚した。13:20 それゆえ、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは、あなたがたが、人々を鳥を取るようにわなをかけたのろいのひもに立ち向かう。それらをあなたがたの腕からもぎ取り、あなたがたが鳥を取るようにわなにかけた人々を、わたしが放す。13:21 わたしは、あなたがたのベールをはがし、わたしの民をあなたがたの手から救い出す。わなにかかった者たちは、もうあなたがたの手のうちにいなくなる。このとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。13:22 あなたがたは、わたしが悲しませなかったのに、正しい人の心を偽りで悲しませ、悪者を力づけ、彼が悪の道から立ち返って生きるようにしなかった。13:23 それゆえ、あなたがたは、もう、むなしい幻も見ることができず、占いもできなくなる。わたしは、わたしの民をあなたがたの手から救い出す。このとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。」

偽預言者の次は、魔女です。魔術、呪法をして人々を騙す女たちであります。先ほどの偽預言者たちの問題は、自分の心のまま、自分の霊のまま語ったことでした。ここでは 19 節、「あなたがたは、ひとつかみの大麦のため、少しばかりのパンのために」であります。彼女たちは、窮乏で苦しんでいるエルサレムの人々から、自分たちが生き残るために占いをして、生き延びようとしてました。それで、主が怒られているのは、彼女たちの呪法のために、生きるべき人が死んでしまいます。

何かの呪いがあると占ったのでしょうか、自殺に追い込んだのでしょうか。そして、罪を犯している者に良いことが起こると言って、それで金を得ました。こうやって、人の人生を狂わせながら、金儲けをしていたことを、主は咎められたのです。

ペテロ第二 2 章 3 節には、「彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食べ物にします。」とあります。作り話のことば、神の正しい言葉に基づくのではなく、それ以外の作り話にその人が身を任せ、信仰を置くようにさせてしまうことは、実に悪いことです。しかも、その目的は、自分のところに金が入ることです。これを主は強く罰せられます。ここでは、女たちが人々を鳥を取るように罠にかけるはずが、取ることができず、人々は彼女たちの罠から逃れるようにすることによって、罰せられます。つまり、儲けができなくなることによってです。

### **3A 偽預言を求める者たち 14**

そして大事なのは、なぜこうした偽預言者や魔女のような者たちが出てくるのか？ということにあります。それは、確かにそうした作り話を聞きたいと願う者たちがいるからだ、ということが分かります。パウロがテモテに言ったとおりです。「2テモテ 4:3-4 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」そこで次に、エゼキエルのところに来る長老たちの話があります。

### **1B 心に偶像を秘めている者たち 1-11**

14:1 イスラエルの長老たちの幾人かが来て、私の前にすわった。14:2 そのとき、私に次のような主のことばがあった。14:3 「人の子よ。これらの者たちは、自分たちの偶像を心の中に秘め、自分たちを不義に引き込むものを、顔の前に置いている。わたしは、どうして彼らの願いを聞いてやれようか。14:4 それゆえ、彼らに告げよ。神である主はこう仰せられると言え。心の中に偶像を秘め、不義に引き込むものを自分の顔の前に置きながら、預言者のところに来るすべてのイスラエルの家の者には、主であるわたしが、その多くの偶像に応じて答えよう。14:5 偶像のために、みなわたしから離されてしまったイスラエルの家の心をわたしがとらえるためである。14:6 それゆえ、イスラエルの家に言え。神である主はこう仰せられる。悔い改めよ。偶像を捨て去り、すべての忌みきらうべきものをあなたがたの前から遠ざけよ。

エゼキエル書は、興味深い書物です。旧約の中にあるけれども、新約にある真理を予め教えているからです。私たちは前回、神が御霊を与えて、石の心を肉の心にしてくださる約束を読みました。まさにそれは、主がニコデモに、「水と御霊によって新しく生まれなければ、神の国を見ることができない。」と言われた、新しい契約の約束であります。そしてここでは、偶像について主は取り扱われますが、「心の中に秘めた偶像」を取り上げておられます。石や木で造られた偶像は、それを拝み、仕えたら偶像礼拝の罪ですが、それ以上にまことの神の他に、自分が神のように大事にしているものがあれば、心の中に偶像を抱いているのです。

偶像とは、言い換えれば「神からの賜物、その良い物を、神からの恵みとして感謝するのではなく、神以上にそれを求める。」と言ったらよいでしょう。ですから、これは見分けるのが難しい時があります。私たちは肉体の欲求は、貪りであると思います。しかし、それは間違いです。身体の欲求自体は、神の与えられた賜物で、主の中にあつて、主が言われていることの中にあれば、それは聖なるもの、清いものなのです。食物を断つこと、結婚を禁じることはむしろ、悪霊の教えであると使徒パウロは言いました。そしてこう教えます。「1テモテ 4:4 神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。」けれども、それらを神のことを考えずに、神の命令以上のことをして貪れば、それはそのまま偶像なのです(コロサイ 3:5)。

けれども、それ以外にも偶像があります。実は、そのことのほうが私たちにとって、深刻です。たとえば、人からの評価はどうでしょうか？「自分が他の人から気になる」ということで、思いがいっぱいになったらどうでしょうか？主はあなたを愛して、キリストの十字架によって、その信仰によって義と認めておられるのです。キリストにあつて完全なのです。それなのに、他の人によって自分を判定しようとしています。これは自意識が神となっており、神以外に神を持っている、偶像であります。また自分のしていることがやめられないこともあるでしょう、完璧にやっついていかないとすまないとするならば、そのしていることがどんなに崇高なことであっても、そうです、クリスチャンとしての活動であっても、神は、休んでご自分を礼拝することを願われているのですから、それ自体が偶像となっています。愛という言葉はどうでしょうか？神は愛であるから、人の罪を裁くのは愛に反するとしたら、どうでしょうか？その愛は果たして神の愛なのでしょうか？いいえ、愛そのものを偶像視して、自分を最も愛している自己愛という偶像なのです。

このように、神からの良き物を神のようにすることが偶像ですが、偶像になっているか、神の恵みとして、賜物として楽しんでいるのかは、その見分けは、「神を主権者とする」ことです。つまり、「それをやめなさい、と言われても、『はい、わかりました。』ということができるか、どうか。」であります。神を神とする時には、その良き物が取られても、それをよしとする時、それを恵みとして受け止めることができます。

そして長老たちの問題は、キリスト者に直接に関わります。神を求めているようにしてきているのですが、実は隠れた動機があつて、それが満たされることを求めています。しかし、躓くことが多いです。なぜなら、自分が神よりも大事にしているものがあつて、それを満たすことができないと判断するからです。ちょうど、金持ちの青年がイエス様の所に来て、あらゆる戒めは守っていると言いながら、実は金を手放すことができずに、悲しい顔をして去ったのと同じです。あの人々が、クリスチャンとしてのカウンセリングの時に、「その人の中に何が偶像であるかを見つける」ことができれば、その人の問題に解決の糸口を差し出すことができると言っていました。

そこで6節ですが、主はそういった長老に対して言いました。「悔い改めよ。偶像を捨て去り、すべての忌みきらうべきものをあなたがたの前から遠ざけよ。」彼らの偶像というのは、もしかしたら

エルサレムそのものだったかもしれませんが。エルサレムにこそ救いがあるということかもしれませんが。したがって、主は、ご自分が神であることを示すためにエルサレムを破壊されるのかもしれませんが。ですから、彼らは思いを変えないといけません。悔い改めます。そして、その心の中の偶像を捨て去ります。そして、主にとって忌み嫌うべきものがあれば、それを遠ざけます。

14:7 イスラエルの家の者でも、イスラエルにいる在留異国人でも、だれでもわたしから離れ、心の中に偶像を秘め、不義に引き込むものを顔の前に置きながら、わたしに尋ね求めようと、預言者のところに来る者には、主であるわたしが答えよう。14:8 わたしがそのような者から顔をそむけ、彼をしるしとし、語りぐさとして、わたしの民のうちから彼を断ち滅ぼすとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。14:9 もし預言者が惑わされて、ことばを語るなら、..主であるわたしがその預言者を惑わしたのである。..わたしは彼に手を伸ばして、わたしの民イスラエルのうちから彼を根絶やしにする。14:10 こういう者たちは、自分たちの咎を負う。この預言者の咎は、尋ね求めた者の咎と同じである。14:11 それは、イスラエルの家が、二度とわたしから迷い出ず、重ねて自分たちのそむきの罪によって自分自身を汚さないためであり、彼らがわたしの民となり、わたしも彼らの神となるためである。..神である主の御告げ。..」

尋ね求めて来る者たちは、心の中に偶像を持っていましたが、その偶像に仕えるように教える預言者たちも同罪であります。神とキリスト以外のものに注意を逸らすように持って行くのであれば、それは大きな罪であり、取り除かれます。これは、実は生々しい誘惑です。これがほしいと願っているのに、主にあって、「その願いはかなえられません。」ということは勇気がいるからです。しかし、その偶像となってしまうことに、否という勇気がなければ、自分は偽預言者となってしまう、裁かれてしまいます。パウロはそのことを、テサロニケの人たちにこのように話しました。「1テサロニケ 2:3-4 私たちの勧めは、迷いや不純な心から出ているものではなく、だましごとでもありません。私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。」

そして興味深いのは、9 節にある主の言葉です。「主であるわたしがその預言者を惑わしたのである。」と主がわざわざ語っておられます。これは、神の主権を強調した言葉です。こうした惑わしをも神は予め知っておられて、ご自分の手中に収めておられることを示しています。惑わしがあっても、主がそれらをすべてご自分の裁きのために取っておかれます。私たちが、いろいろ悪い知らせを聞く時に、覚えていたい言葉ですね。

## 2B 正しい者によって救われない町 12-23

14:12 次のような主のことばが私にあった。14:13 「人の子よ。国が、不信に不信を重ねてわたしに罪を犯し、そのためわたしがその国に手を伸ばし、そこのパンのたくわえをなくし、その国にききんを送り、人間や獣をそこから断ち滅ぼすなら、14:14 たとい、そこに、ノアとダニエルとヨブの、これら三人の者がいても、彼らは自分たちの義によって自分たちのいのちを救い出すだけだ。..神

である主の御告げ。・・14:15 もし、その地にわたしが悪い獣を行き巡らせ、その地を不毛にし、荒れ果てさせ、獣のために通り過ぎる者もなくなるとき、14:16 たとい、その地にこれら三人の者がいても、・・わたしは生きている。神である主の御告げ。・・彼らは決して自分の息子も娘も救い出すことができない。ただ彼ら自身だけが救い出され、その地は荒れ果てる。14:17 あるいは、わたしがその地に剣を送り、『剣よ。この地を歩き巡れ。』と言って、人間や獣をそこから断ち滅ぼすとき、14:18 たとい、その地にこれら三人の者がいても、・・わたしは生きている。神である主の御告げ。・・彼らは決して自分の息子も娘も救い出すことができない。ただ彼ら自身だけが救い出される。14:19 あるいは、わたしがその地に疫病を送って、人間や獣をそこから断ち滅ぼすために、血を流してわたしの憤りをその地に注ぐとき、14:20 たとい、そこに、ノアとダニエルとヨブがいても、・・わたしは生きている。神である主の御告げ。・・彼らは決して息子も娘も救い出すことができない。彼らは自分たちの義によって自分たちのいのちを救い出すだけだ。

正しい人の代表的な人物として、「ノア」と「ダニエル」と「ヨブ」という具体名が出ています。注目すべきは、「ダニエル」です。彼はエゼキエルと同じ時代に生きていた人であるということです。彼はエゼキエルよりも数年前に、第一バビロン捕囚で捕え移された人ですが、彼がいかに霊的な人であったか、そしてその評判がかなり広まっていたことを、ここから伺い知ることができます。そして、ノアも正しい人であったと創世記に書かれていますし、ヨブも正しい人であったことがヨブ記に書かれていますね。彼らがいれば、町全体が赦されるか？という問いかけに対して、「いいえ、そんなことはありません。彼らはその義のゆえに自分たちは救われるが、他の人々が他人の義をかりて、救われることはありません。」ということです。

確かに過去に、一部の者の執り成しの祈りによって、町全体が救われたことがあります。ヒゼキヤ王しかり、ヨシヤ王しかりです。ですから、彼らはそれを期待して、「だれかそこに正しい人がいるのであれば、エルサレムも助かるのだらう。」と甘いことを考えていたのでしょう。しかし主は、その思いを粉碎されます。ここにも、新約にはっきりと啓示されている神の真理があります。それは、「各々が自分のしたことの報いを受ける。」ということです。たとい共同体の中にあっても、神を信じるという行為を本人がすることによって、初めて神から生まれることができるということです。「ヨハネ 1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」後の章で、父の罪が子に受け継がれることはない、また父の義が子に受け継がれることはない、という真理も語られるようになります。

14:21 まことに、神である主はこう仰せられる。人間や獣を断ち滅ぼすために、わたしが剣とききんと悪い獣と疫病との四つのひどい刑罰をエルサレムに送るとき、14:22 見よ、そこに、のがれた者が残っていて、息子や娘たちを連れ出し、あなたがたのところへやって来よう。あなたがたは彼らの行ないとわざとを見るとき、わたしがエルサレムにもたらしたわざわいと、わたしがそこにもたらしたすべての事について、慰められよう。14:23 あなたがたは、彼らの行ないとわざとを見て慰

められる。このとき、あなたがたは、わたしがそこでしたすべての事はゆえもなくしたのではないことを知ろう。…神である主の御告げ。…」

何をもって「慰められる」のか？これは、「自分たちが神の罰によって、バビロンに捕え移されて、彼らはそうではないからエルサレムに残っていたのだと思っていたが、実はそうではなくて、彼らも同罪であったことが分かった。」という慰めです。ですから、あまり良いことはありません。けれども、ここで初めて神のご計画の全貌が分かります。神が決してエルサレムそのものを避難所としておられないこと。そうではなく、神の憐れみがあって、そこを選ばれて、ご自分の住まいとしておられたこと。神ではなく、そこを神としてしまうのであれば、神は取り除くこともされるのです。それゆえ、神はわずかな者たちを、残りの者たちをバビロンに連れてきて、破壊を伝え聞いて、それで主こそが神であることを知るのです。

私たちはですから、教えでさえ、それが偽りもあるのだということを知る必要があるでしょう。主が守り、成長させてくださいます。イエス・キリストの恵みと知識の中で成長します。